事業実施報告書

法人名　　特定非営利活動法人のらんど

事　　業　　名	さまざまな主体が関わる見沼の田畑の管理を地域の人に知ってもらう事業
枠の種類	ネーミング事業
分　　野	（株）富士薬品ドラッグセイムス　環境保全支援事業
①事業の目的・この事業で取り組んだ課題	【目的】見沼田んぼに増える遊休農地のうち、昨年度の耕作実績より畑地を 4 倍の広さに広げ、より様々な分野のＮＰＯ法人等と協働し、農地として活用、保全する。農作業には貧困支援だけでなく障害福祉活動を行う他団体の利用者にも活躍してもらう。 新型コロナウィルス感染症の影響で地産地消の重要性が再認識される今、多くの人を集めるイベントの開催が難しいからこそ、地域の住民に見沼田んぼの存在や管理の必要性、そこで行われている様々な違いを持つ人による保全管理の活動について知ってもらう。 【課題】 ・管理する農家や NPO の高齢化により増加する見沼田んぼの遊休農地。昨年よりも広い面積を農地として活用することで、見沼田んぼの環境を保全。 ・継続的に営農することで、地域の障害福祉や貧困支援などの利用者の仕事の選択肢となる。 ・新型コロナウィルス感染症の拡大により、地産地消の重要性が再認識される中、見沼田んぼの存在や意義を地域住民に知ってもらう。 ・若者の関わりが少なくなっている見沼。ＳＮＳネイティブ世代である大学生を中心とした若者に、見沼の魅力を発信してもらう。
②課題を解決するため、取り組んだ個々の事業	見沼田んぼ内の遊休農地を活用して、以下の事業を展開。 （１）農地を活用した農作物の生産管理 （２）見沼田んぼの野菜を活用した加工品の開発 （３）見沼田んぼの存在意義、活用の重要性を地域住民に知ってもらうための広報 【昨年度との違い】 ・管理面積の増加。畑半反から２反へ。地元の協力が得られるようになってきたことによる。 ・ＮＰＯ法人見沼保全じゃぶじゃぶラボ（不耕起米栽培による見沼保全）だけでなく、ＮＰＯ法人ほっとプラス（貧困支援）、ＮＰＯ法

	人ビーポップ（障害福祉）といった、より多くの団体と協働。 ・コロナウィルスの影響で、広く人を集めるイベントの開催ができないからこその、地域の人に知ってもらう工夫。 ・たくさんの人を集めるのが難しいからこそ、大学生を中心とした若者の得意なＳＮＳで、若い層からの発信に力を入れる。
③個々の事業の内容・実施結果	（１）農地を活用した農作物の生産管理 ①場所：さいたま市緑区南部領辻　田畑 ②時期： ・定例作業日 　のらんどスタッフ 2～3 名、通年参加者（市内在住 5 名）、関連団体（見沼田んぼ福祉農園協議会、NGO NICE）からの参加者数名で行った。 7 月 4 日　田んぼ除草、8 名 8 月 1 日　田んぼ除草、里芋土寄せ　7 名 8 月 22 日 田んぼ除草　6 名 9 月 5 日　田んぼ除草、防鳥ネット張り　7 名 10 月 3 日 稲刈り　12 名 11 月 14 日 収穫会　6 名 ・平日管理 　見回り、管理作業は平日毎日。スタッフ 3 名、ボランティア 1 名、繁忙期は他団体の協力を得た。他団体の協力を得た日は以下。 7 月 17 日　畑除草　就労センター夢燈館　4 名 9 月 9 日　　田んぼ除草　ほっとプラス　3 名 10 月 7 日　稲刈り　就労センター夢燈館 6 名、ほっとプラス 2 名 11 月 11 日 里芋収穫 就労センター夢燈館 3 名,ほっとプラス 3 名 11 月 12 日 里芋収穫　就労センター夢燈館 4 名 ③内容 ・畑：里芋（70kg）、八ツ頭（30kg）、カボチャ（30 個）、唐辛子（6kg）、サツマイモ（120kg）の生産 ・田んぼ：米（68kg）の生産 （２）見沼田んぼの野菜を活用した加工品の開発 　見沼の野菜をより多くの人に知ってもらえるよう、生の野菜だけでなく、日持ちがし、手軽に手に取ってもらえるような加工品を開発。フードプランナー中山晴奈氏の協力のもと、唐辛子のピクルス（数種類の味）、里芋のアイスクリーム（SLOW GELATO とコラボ）などを試作。

①場所： フードプランナーのキッチン、SLOW GELATO
②時期・内容
8 月　唐辛子収穫、試作
9 月　唐辛子収穫、試作、冷凍
10 月 冷凍唐辛子、試作
11 月 里芋収穫、保管
12 月 料理家による里芋を使った煮しめ（お節の 1 品）製作
2 月　里芋のアイス、八ツ頭のお餅、試作

（３）見沼田んぼの存在意義、活用の重要性を地域住民に知ってもらうための広報
①ＷＥＢ上での広報
・法人ホームページ
・埼玉県 NPO 情報ステーション NPO コバトンびんでの活動紹介
③ＳＮＳを活用した広報
法人の SNS からの発信とともに、関係者の個人アカウントでのシェア協力をお願いした。東京農業大学の学生インターンを受け入れ、期間中の発信をお願いした。
Facebook、Instagram、Twitter　の 3 媒体を利用。
④野菜・加工品の販売活動を通した広報
・11 月　Catering for me!　料理家によるお節の煮しめに利用
・12 月-1 月（株）eff による生産ストーリーを紹介しながらの消費者への対面販売。
　※チラシについては、7 月から毎月、さいたま市市民活動サポートセンター他へ配布する予定であったが、コロナ禍により、施設に人が集まることが難しくなったため、チラシ配布効果が見込めないと判断し、中止した。
⑤団体広報誌・メールマガジン
団体会員、広報紙・メルマガ会員、団体サービス利用者 250 人/月

時期	
7 月	田畑管理、一部野菜収穫開始、加工品考案、ＳＮＳ発信準備・発信開始、野菜販売場所交渉、（6 月に、田植え・野菜植え付け済み）
8 月	田畑管理、加工品試作
9 月	田畑管理、加工品試作
10 月	田畑管理、米収穫・脱穀、加工品試作

<table>
<tr><td></td><td>
<table>
<tr><td>11 月</td><td>田畑管理、野菜収穫、収穫会</td></tr>
<tr><td>12 月</td><td>田畑管理、野菜販売、加工品試作</td></tr>
<tr><td>1 月</td><td>田畑管理、加工品試作</td></tr>
<tr><td>2 月</td><td>田畑管理、加工品試作</td></tr>
</table>

〇広報実績について
上記（３）の通り。</td></tr>
<tr><td>④個々の事業の実施により達成した成果の具体的な内容</td><td>（１）農地を活用した農作物の生産管理
①場所：さいたま市緑区南部領辻　畑 2 反（昨年より 1.5 反増）、田んぼ半反
②時期：7 月から 2 月。(7 月から 11 月：米づくりと野菜づくりのための毎月 1~2 回の土曜日の定例作業日と、平日の管理作業、見回り。12 月から 2 月：土づくりを主とした平日の管理作業、見回り）
③内容
・畑：里芋（70kg）、八ツ頭（30kg）、カボチャ（30 個）、唐辛子（6kg）、サツマイモ（120kg）の生産
・田んぼ：米（68kg）の生産
・作業者：のらんどスタッフ２名、通年参加者（市内在住者）４名、障害福祉施設利用者（就労センター夢燈館）７名、貧困支援利用者（ＮＰＯ法人ほっとプラス）２名、ボランティア１名。
※学生ボランティアを募集していたが、大学から学生への活動休止要請が出ていたため、集められず。近隣住民ボランティア 1 名のみの参加となった。

（２）見沼田んぼの野菜を活用した加工品の開発
　見沼の野菜をより多くの人に知ってもらえるよう、生の野菜だけでなく、日持ちがし、手軽に手に取ってもらえるような加工品を開発。フードプランナー中山晴奈氏の協力のもと、唐辛子のピクルス（数種類の味）、里芋のアイスクリーム（SLOW GELATO とコラボ）などを試作。
①場所：　フードプランナーのキッチン、SLOW GELATO
②時期・内容
　8 月　唐辛子収穫、試作
　9 月　唐辛子収穫、試作、冷凍
　10 月　冷凍唐辛子、試作
　11 月　里芋収穫、保管</td></tr>
</table>

	12 月　料理家による里芋を使った煮しめ（お節の 1 品）製作 2 月　里芋のアイス、里芋の春巻き、八ツ頭のお餅、試作 （３）見沼田んぼの存在意義、活用の重要性を地域住民に知ってもらうための広報 ①ＷＥＢ上での広報 ・法人ホームページ ・埼玉県 NPO 情報ステーション NPO コバトンびんでの活動紹介 ②ＳＮＳを活用した広報 法人の SNS からの発信とともに、関係者の個人アカウントでのシェア協力をお願いした。東京農業大学の学生インターンを受け入れ、期間中の発信をお願いした。Instagram や Twitter を通じた近隣団体からの連絡が 3 件。SNS 経由で法人のホームページなどにアクセス、イベントやボランティアの問合せが 8 件あった。 ・Facebook　リーチ数が 7～10 倍程度に。 ・Instagram　今年から。フォロワー88 人に。 ・Twitter　昨年から。フォロワー数 38 人（34 名増加）。 ③野菜・加工品の販売活動を通した広報 ・フードコーディネーターの協力により、里芋を著名な料理家のケータリングメニューに使ってもらうことができた。 ・農作物生産の背後のストーリーを消費者に伝えて売るという方法をとっている卸業者を通した野菜の販売を行った。 ④団体広報誌・メールマガジン 団体会員、広報紙・メルマガ会員、団体サービス利用者 250 人/月
⑤費用の工夫	・公共施設の利用や人の集まりが制限されていたため、チラシ配布効果は低いと判断し、中止した。 ・ぬかやもみ殻灰、もみ殻は近隣農家から無料で提供してもらうことができ、もみ殻燻炭を自作するなどして、肥料代を節約できた。 ・コロナの影響もあったので講師に来てもらう回数を少なくし、1 回での学ぶ量を多くしたため、講師謝金を節約できた。
⑥地域社会への還元について	・地域の人が見沼田んぼやそこで行われる活動のことを知り、関わるきっかけをつくった。 ・障害福祉団体や貧困支援団体の利用者が働く場を作ることができた。活動を拡大していくことで、さらに多くの人に働いてもらうことができることがわかった。

⑦今回の事業が他の団体、行政等が実施する同種の事業と比べて優れていること	・コロナウィルスの影響があることを前提に、地域の活動を広く広報する方法を探ったこと。 ・同種の活動団体に限らず、地域のさまざまな団体や農家と協働していること。 ・加工品はじめ生産物の販売についてプロのフードデザイナーのアドバイスを得たことで、さまざまな資金獲得の方法を検討することができたこと。
⑧事業の実施体制	○事業の実施について ①総括責任者：サカール祥子 ②連絡責任者：サカール祥子 ③現場責任者：サカール祥子 ④経理担当者：高橋葵 ⑤広報担当者：高橋葵
⑨来年度以降どう事業を継続し発展させていくか	・フードデザイナーのアドバイスをもとに、生産物や加工品の販売をすることで自己資金を得ていく。 ・コロナが収束次第、イベントを再開し、参加費収入を得ていく。 ・広報に関して、SNS において今回得たファンを話さないために、こまめな配信、イベントの開催をしていく。 ・コロナが長引くことを鑑み、オンラインによるイベントの開催も検討・開発する。